

公益財団法人 四万十川財団  
TEL 0880-29-0200  
FAX 0880-29-0201  
Mail office@shimanto.or.jp  
URL http://www.shimanto.or.jp



■四万十リバーマスター × 大分川研修

清流通信第 229 章で紹介した四万十リバーマスター。上流から下流まで約 90 名の川の達人たちがボランティアで四万十川の保全活動等に取り組んでいる。先日、四万十リバーマスターのメンバーと大分県の由布院を訪れ、大分川上流域の保全活動に取り組む「豊かな水環境ゆふいん創出会議」の方々と研修会・交流会を開催した。今月号はその様子について紹介したい。

話せば長くなるが、ゆふいん会議と四万十リバーマスターが出会ったのは一昨年の 11 月。大分県庁の環境保全課より、今後大分県内の河川保全活動に取り組むに当たり、四万十を視察で訪れたいとの連絡があった。具体的な保全活動についての話はもちろん、官民がどのように連携しているかについても話を聞きたいということだったので、四万十リバーマスターの皆さんと直接話をしてもらおう場を設け、由布院の皆さんをお迎えした。

その結果、見事に意気投合したメンバー達。次は我々が由布院を訪れると固い約束を交わし、そして先日の研修会へと繋がるわけである。

大分川での研修初日は、由布院のまちづくりの先覚者である溝口薫平氏より観光と景観という視点からまちづくりの話を含めつつ由布院を紹介していただいた。シンボルの由布岳がどこからでも見えるよう建物の高さへの配慮を続けてきたこと、観光客が増えてきたからと言ってやみくもに宿泊施設を増やさなかったことなど、目先のことだけにとらわれず、由布院の地域らしさを活かしながらか長く続けていけるまちづくりを意識して来られたことが話から感じ取れた。

溝口氏の話のあとは、グループに分かれて川についての意見交換を実施。豊かな川とはどんな川なのか。生物多様性と外来種。山の手入れと地主さんとの関係。参加者の経歴も様々な中で

深い議論が交わされ、途中で時間切れ。続きはお酒を交わしながらということで交流会へと移った。交流会では、話の続きをしながらも由布院の美味しいお酒と食を堪能。また、四万十の鮎やお酒もお土産に持参した。交流会後にはもちろん温泉も楽しんだ。

二日目は、現地視察へ。金鱗湖や大分川を案内していただいた。その中でも衝撃的だったのが、大分川の支流で大量発生しているオオセキショウモの様子であった。オオセキショウモは外来種で繁殖力が強く、葉の長さは軽く 1 メートルを超える。これが川を埋め尽くすように繁殖しており、在来種に影響を与えているのはもちろん、川の氾濫の原因になっていたり、稲作にも影響を与えているという。半年前に大掛かりな駆除を行ったものの、あっという間に繁殖し、また以前の状態に。今後も息の長い駆除を行う予定だという。



## ■四万十リバーマスター × 大分川研修を四万十で活かす

由布院の皆様の厚いおもてなしを受け、大変充実した大分川研修。この研修を受け、我々が四万十でさらに力を入れていくべきだと感じたことは、「仲間づくり」と「官学民の連携」である。仲間づくりについては、溝口氏の話から、全員が同じ方向を向いて進んでいくことは難しいが、それでも個々の得手不得手をよく見極めながら多くの人を巻き込んでいかなければならないと再認識できた。また、官学民の連携については、由布院が取り組んでいる天然記念物の保護の話から、四万十は”学”との連携が弱いことを実感。川の保全には、多様な視点からのアプローチと全体のバランスが必要で、そこには専門的な知見が必要となってくる。ありがたいことに四万十川財団の関係者や清流通信の読者の中には、植物や生物の専門家、漁協関係者、地域作りに取り組む方など様々な方がおられるので、手を取り合いながら今後”学”との連携を強化していきたいと感じた。

## 着衣泳講習会のご案内

無料



四万十川財団では、四万十川流域の小中高等学校を対象に着衣泳の講習会を行っています。日本赤十字社から講師を招き、校内のプールを使って実際に着衣泳の体験をしたり、溺れてしまったときの対応などを教えていただきます。講師料等不要。お気軽にご相談ください。

### ●お問い合わせ

公益財団法人四万十川財団

Tel 0880-29-0200 / Mail office@shimanto.or.jp

※講師料等不要。当財団で負担します。

※講習実施日の約3か月前までにご相談ください。

## 着衣泳とは？

着衣泳とは、着衣状態で浮いたり移動したりする動作のことです。万が一、川や海に落ちてしまった場合、あなたはどのようにしますか？



- ・急いで服や靴を脱ぐ
- ・大きく手を振って助けを呼ぶ
- ・自力で岸まで泳いでいく



洋服や靴は水を含むと非常に重く、動きの妨げになるため着衣状態での遊泳は危険です。しかし、着衣状態で水中に落ちてしまった場合、脱衣することは返って命を危険にさらしてしまうのです。無理な体制をとることで水を飲んでしまったり呼吸が難しくなったりするだけでなく、体力を消耗してしまいます。同じ理由で、手を振って助けを呼ぶことや自力で泳いでいくことも控えた方が良いと考えられています。また、洋服は体を保温したり、靴は浮き具として活用できますので、まずは冷静になることが第一です。

## ただ、浮いて待つ・・・！？



もしもの時、溺れた人はじっと浮いて待つことが命を助ける一番の方法だと考えられています。しっかり顎を上げ、大きく手足を開いて力を抜けば、必ず人間は呼吸できるそうです。しかし、溺れた本人がこれを理解し、冷静にならなければ命を助けることは非常に難しいと言えるでしょう。子ども達が自分の命を自分で守れるよう、この機会に是非受講をご検討ください。